日本における中国画題綜覧（四）

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan（4）

張　小鋼
Zhang　Xiaogang

お行（二）

おうはふせん　王霸不戦

王霸、字は元伯といい、潁川潁陽の人である。かつて彼は牢獄の看守であったが、その仕事が好きでなかった。後に漢の光武帝について戦いに行った。光武帝が即位した後、彼を偏将軍に任命した。建武四年（28）に光武帝の命を受け、王霸と捕虜将軍馬武がともに周建を掃討に行った。そこで蘇茂が軍隊を率いて周建を掩護に行った。彼はまず馬武の糧の輸送路を切断した。馬武が反撃に出たが、今度周建と蘇茂の挟み撃ちを受けた。馬武は大敗し、味方の王霸の駐屯地へ逃げてきたが、王霸は受け入れなかった。王霸は「受け入れないと、敵は必ず軽装で進撃する。一方馬武の軍が背水の陣となり、戦闘力が倍増するだろう。敵が疲れたところでわれわれが出撃すると、必ず勝つ」と分析した。はたして、戦闘の情勢が王霸の予測通りに展開し、覇が勇士路潤らを遣って馬武軍を救った。しかし、敵はあきらめず、また挑発してきた。王霸は守り態勢を固め、応戦しない。逆に兵士たちを労い、宴会を開いた。蘇茂軍の矢が雨のように打ちこまれ、王霸の盃にも当たった。しかし王霸は少しも動こうとしなかった。彼は「蘇茂の軍が遠方から来たので、食糧が不足のはず。このままにすれば、戦わずに勝つだろう。これは最高の勝ち方だ」と言った。今回も王霸の予測通り、蘇茂、周建が相手にされず、引き帰った。一方周建の兄の子である周誦が反乱を起こしたため、蘇茂、周建が城に入れず、逃げた。周誦は城をもって王霸に降伏した。

【出典】

王霸，字元伯，潁川潁陽人也。世好文法，父爲郡決曹掾，霸亦少爲獄吏。常慷慨不樂吏職。其父奇之，遣西學長安。［中略］光武卽位，以霸曉兵愛士，可獨任，拜爲偏將軍，并將臧宮、傅俊兵，而以宮、俊爲騎都尉。建武二年，更封富波侯。四年秋，帝幸譙，使霸與捕虜將軍馬武東討周建於垂惠。蘇茂將五校兵四千餘人救建，而先遣精騎遮擊馬武軍糧，武往救之。建從城中出兵夾擊武，武恃霸之援，戰不甚力，爲茂、建所敗。武軍奔過霸營，大呼求救。霸曰，賊兵盛，出必兩敗，努力而已。乃閉營堅壁。軍吏皆爭之。霸曰，茂兵精銳，其衆又多，吾吏士心恐，而捕虜與吾相恃，兩軍不一，此敗道也。今閉營固守，示不相援，賊必乘勝輕進。捕虜無救，其戰自倍。如此，茂衆疲勞，吾承其弊，乃可剋也。茂、建果悉出攻武。合戰良久，霸軍中壯士路潤等數十人斷髮請戰。霸知士心銳，乃開營後，出精騎襲其背。茂、建前後受敵，驚亂敗走，霸、武各歸營。賊復聚衆挑戰，霸堅臥不出，方饗士作娼樂。茂雨射營中，中霸前酒樽，霸安坐不動。軍吏皆曰，茂前日已破，今易擊也。霸曰，不然。蘇茂客兵遠來，糧

食不足，故數挑戰，以儆一切之勝。今閉營休士，所謂不戰而屈人之兵，善之善者也。茂、建既不得戰，乃引還營。其夜、建兄子誦反，閉城拒之，茂、建遁去，誦以城降。（南朝宋・范曄撰『後漢書』巻二十，銚期王霸祭遵列傳第十）

【作例】

「王覇不戦」（普斎岡子雉著述［大岡普斎］、橘辨次守国［橘辨次］圖畫『畫典通考』巻八、享保一二年［1727］寶文堂刊本）

おうばんへきかんにしをふす　王播壁間賦詩

王播（759～830）は、字は明敭といい、太原（山西省）の人である。科挙の試験に及第し、進士となった。集賢校理、監察御史、侍御史、尚書左僕射を歴任した。太和四年（830）、播はのどが腫れて急死した。享年七十二歳であった。王播が壁に詩を賦すという出典は不詳である。

【出典】

王播字明敭。［中略］播擢進士第，登賢良方正制科，授集賢校理，再遷監察御史，轉殿中，歴侍御史。［中略］文宗即位，就加檢校司徒。大和元年五月，自淮南入覲，進大小銀盌三千四百枚，綾絹二十萬匹。六月，拜尚書左僕射、同平章事、領使如故。二年、進封太原公、太清宮使。四年正月，患喉腫暴卒，時年七十二。廢朝三日，贈太尉。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』巻一百六十四，列傳第一百十四）

案：中華書局『舊唐書』には「大和元年五月」となっているが、誤りである。唐文宗の年号は「太和」となるべきである。

【作例】

「王播壁間賦詩」（保井恕庵編述、大森捜雲子筆『畫本福寿海』、享保一九年［1734］刊本）

おうひんし　王彬之

王彬之は蘭亭四十二人（四十三人）の一人である。

【出典】

→「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「王彬之」（文鳳山人［文鳳駿聲］『文鳳畫譜』三編、文化八年［1811］河内屋・吉田屋刊本）

おうふうし　王風子（王同子）

「王風子」は「王同子」の誤りである。「王同子」は王鼎の号である。

→「王鼎」

【作例】

「王風子」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻三、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1753］白雲館刻本）

おうふじん　王夫人

→「太眞王夫人」

【作例】

「王夫人」（蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年［1794］須原屋板）

おうふほうえき　王符縫掖

王符は字が節信といい、安定の臨涇（甘粛省鎮原東南）の人である。子供のころから勉強が好きである。俗の世界に合わないので、なかなか昇進できない。そこで隠居し、文筆業に専念した。著書に『潛夫論』がある。度遼将軍皇甫規が引退して故郷に帰ってきた。同じ故郷に金を出して鴈門太守という官職を買った人もちょうど引退して帰ってきた。その太守が皇甫規を訪れて来たが、規が「君のところの鴈が美味しかったか」と皮肉った。後に王符が訪れると、規が慌てて起きて、

服の紐を結べず、靴をさかさまに履いて出迎えたのである。故に世に「二千石の年俸よりも、逢掖（袖の大きい儒者の服）の方が価値ある」ということわざがある。（南朝宋・范曄撰『後漢書』巻四十九、列傳第三十九）

【出典】

後漢　王符字節信，安定　臨涇人。少好學，有志操。耿介不同於俗。以此遂不得升進。乃隱居著書三十餘篇，以譏當世失得，號潛夫論。後度遼將軍皇甫規解官歸。鄉人有以貨得鳥門太守者，亦去職還家，書刺謁規，規臥不迎。既入而問，卿前在郡食鳥美乎。有頃又白，王符在門。規素聞符名，乃驚遽而起，衣不及帶，屣履出迎，援符手而還，與同坐極歡。時人爲之語曰，徒見二千石，不如一縫掖。言書生道義之爲貴也。後竟不仕。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「王符縫掖」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻三、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

おうぶんせい　王文成

→「王陽明」

【作例】

「王文成」（清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年［1743］刻本）

「王文成」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］寶文堂刊本）

おうほう　王褒

王褒、字は子登といい、范陽（河北省涿州）の人である。漢の安国侯の七世の孫である。幼い頃から道教が好きである。崋山に入り九年。ある日の真夜中に、突然林と池から人や馬や簫や太鼓などの音が聞こえてきた。あっという間に近付いた。千乗萬騎が空からやってきた。神人が雲の車に乗り、手に虎符がある。停車して褒を呼んで、「私は太極西梁子文だ。あなたが勉強好きで勤勉とのことを聞いたので、あなたに伝えに来た。あなたの名前は既に登録しており、そのうち小有司に任命されるはずだ。寶籍の管理を司る。天王の任に任される。」と言った。

【出典】

王褒，字子登，范陽人。漢　安國侯七世孫。少好道，入華山九年。一日夜半，忽聞林澤有人馬簫鼓之聲。須臾漸近，見千乘萬騎，浮空而至。神人乘雲車，手把虎符。停車而呼褒曰，吾太極眞人西梁子文也。聞子好學勤勞，故來語汝。汝名登上清，他日位當小有司。掌寶籍。爲天王之任。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻三）

【作例】

「王褒」（明・王世貞『有象列仙全傳』巻三、萬暦二八年［1600］玩虎軒刊本）

「王褒」（馬場信意『分類畫本良材』巻五、正徳五年［1715］須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板）

「王褒」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』三、天明四年［1784］寂照寺蔵板）

「王褒」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

「王褒」（南里亭其樂輯、葛飾戴斗畫『二十四孝圖會』、文政五年［1822］河内屋等發兌）

「王褒」（悟足齋固碩書『二十四孝繪抄』天保一三年［1842］、須原屋等發行）

おうほうはくさん　王褒柏慘

王裒は字が偉元といい、城陽の営陵（山東省昌楽）の人である。彼の父親が魏文帝の司馬であった。文帝の逆鱗に触れたため、処刑された。そのため、裒が悲しくて父親の墓の傍で小屋を建て、朝と晩を欠かさず墓の前で跪いて拝んだ。裒がまた墓の前の柏木を抱きながら号泣し、その涙が木に流れたので、木が枯れたのであった。（唐・房玄齢等撰『晋書』巻九十八、列傳第五十八）

【出典】

晉書，王裒字偉元，城陽 營陵人。少立操尚。博學多能。其父儀爲文帝 司馬見殺。裒痛父非命，未嘗西向而坐。示不臣朝廷也。隱居教授。廬於墓側，旦夕常至墓所拜跪。攀柏悲號，涕淚著樹，樹爲之枯。母性畏雷。母沒。每雷輒到墓曰，裒在此。及讀詩至哀哀父母，生我劬勞，未嘗不三復流涕。門人受業者，並廢蓼莪之篇。家貧躬耕，計口而田，度身而蠶。或有助之者不聽。舊本裒作褒非。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「王裒柏慘」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

おうぼつ　王勃

王勃（648～675）、字は子安といい、絳州龍門（山西省河津）の人である。王勃が六歳の頃、文章を読め、頭が切れる。父親の友人杜易が勃を二人の兄と合わせて「王氏の三珠樹」と称賛した。弱冠の年にして、科挙の試験を受け、及第した。『宸遊東嶽賦』や『乾元殿賦』を献上した。沛王は彼の名声を聞き、沛府に招き、修撰に任命した。甚だ大事にされた。諸王が闘鶏をして、互いに勝負五分五分であるため、勃が『檄英王鶏』を面白半分で書いた。しかし高宗帝がそれを読んで、立腹し、「これにより内輪喧嘩の元になる」と言い切って即日勃を叱責して府から追い出した。暫くして勃は州の参軍という職を得た。その時、官奴である曹達が罪を犯し、勃は彼をかくまった。だが、漏えいを恐れて、達を殺してしまった。結局、事件が発覚され、勃は死刑になる見通しだった。ところが、ちょうど恩赦に逢い、その代りに勃の父親が連座で交趾令に左遷された。上元二年（675）勃は交趾（ベトナム北部）に父親に会いに行ったが、海に墜落して亡くなった。二十八歳であった。

【出典】

王勃，字子安，絳州 龍門人。祖通，隋 蜀郡司戸書佐。大業末，棄官歸，以著書講學爲業。依春秋體例，自獲麟後，歷秦 漢至於後魏，著紀年之書，謂之元經。又依孔子家語、揚雄法言例，爲客主對答之說。號曰中說。皆爲儒士所稱義。義寧元年卒。門人薛收等相與議，謚曰文中子。二子福畤、福郊。勃六歲，解屬文，構思無滯，詞情英邁，與兄勔、勰才藻相類。父友杜易簡常稱之曰，此王氏 三珠樹也。勃年未及冠、應幽素舉及第，乾封初詣闕，上宸遊東嶽頌，時東都造乾元殿，又上乾元殿頌，沛王賢聞其名，召爲沛府修撰。甚愛重之。諸王鬬雞互有勝負，勃戲爲檄英王雞文。高宗覽之，怒曰，據此是交搆之漸。卽日斥勃，不令入府。久之，補虢州參軍，勃恃才傲物，爲同僚所嫉，有官奴曹達犯罪，勃匿之。又懼事洩，乃殺達以塞口。事發當誅，會赦除名時，勃父福畤爲雍州司戸參軍，坐勃左遷交趾令。上元二年，勃往交趾省父，道出江中，爲採蓮賦，以見意，其辭甚美。渡南海，水而卒。時年二十八。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』巻一百九十上，列傳第一百四十上）

勃字子安，絳州 龍門人。未冠應幽素舉及第，授朝散郎。沛王賢聞其名。召爲沛府修撰。是時諸王鬥雞，戲爲文檄英王雞。高宗覽之怒，斥出府。久之，補虢州參軍。官奴曹達犯罪，勃匿之。既懼事泄，殺達滅口。事覺當誅，會赦除名。上元二年。渡南海墮水卒。年二十八。

四

（『欽定全唐文』巻一百七十七）
勃，字子安，太原人，王通之諸孫也。亦云，祖父通，隋秀才高第，蜀郡司戸書佐，蜀王侍讀。大業末，退講藝於龍門。其卒也，門人謚之曰文中子。（元・辛文房撰『唐才子傳』巻一）

【作例】
「王子安」（清・上官周繪『晩笑堂畫傳』、乾隆八年［1743］刻本）
「王勃」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

おうぼばんとうをもつず　王母持蟠桃圖

→「西王母」

【作例】
「王母持蟠桃圖」（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻七、享保五年［1720］稱觥堂板、明和七年［1770］須原屋・柏原屋再板）

おうまきつ　王摩詰

→「王維」

おうむ　鸚鵡

鸚鵡は人の言葉を真似ることができる。青い羽に赤いくちばしで、鴉のような形である。交州（広東省）、巴南に生息しているという。

【出典】
鸚鵡，人舌，能言。青羽赤喙，其狀如鴉。舊說衆鳥足趾前三後一，其目下瞼眨上。唯鸚鵡四趾齊分，兩瞼俱動，如人目。交州　巴南盡有之。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一巻）

【作例】
「鸚鵡」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「鸚鵡」（中村惕斎編『訓蒙圖彙』巻十三、寛文六年［1666］山形屋刊本）
「鸚鵡」（葛飾戴斗畫『花鳥畫傳』二編、嘉永二年［1849］叙、嵩山房・郡玉堂同梓、須原屋等發行）
「鸚鵡」（『職巧雛型錦袋畫叢』、文政一一年［1828］文花堂刻本）
「鸚鵡」（橘守国畫圖『運筆麁畫』巻中、寛延一年［1748］序、弘化一年［1844］熙春堂蔵板、須原屋など發行）

おうようえいしゅく　歐陽永叔

→「歐陽修」

【作例】
「欧陽永叔像」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物七巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「欧陽永叔」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］保壽堂・養心堂刻本）

→「永叔」

おうようこう、しゅうやとうかにしょをよみひとりたのしむのず　歐陽公秋夜燈下に書を讀み獨樂乃圖

宋の歐陽修（永叔）の「秋声賦」を図解する挿絵である。全部で三枚あり、これは「其一」である。

【出典】
歐陽子方夜讀書，聞有聲自西南方來者。悚然而聽之曰，異哉。初淅瀝以蕭颯。忽奔騰而砰湃。如波濤夜驚，風雨驟至。其觸於物也，鏦鏦錚錚，金鐵皆鳴。又如赴敵之兵，銜枚疾走，不聞號令，但聞人馬之行聲。余謂童子，此何聲也。汝出視之。童子曰，星月皎潔，明河

在天，四無人聲，聲在樹間。余曰，噫嘻悲哉，此秋聲也。胡爲乎來哉。蓋夫秋之爲狀也，其色慘淡，煙霏雲斂。其容清明，天高日晶。其氣慄冽，砭人肌骨。其意蕭條，山川寂寥。故其爲聲也，淒淒切切，呼號奮發。豐草綠縟而爭茂，嘉木蔥蘢而可悅，艸拂之而色變，木遭之而葉脫。其所以摧敗零落者，乃其一氣之餘烈。夫秋刑官也，於時爲陰。又兵象也，於行爲金。是爲天地之義氣，常以肅殺而爲心。天之於物，春生秋實。故其在樂也，商聲主西方之音，夷則爲七月之律。商傷也，物既老而悲傷。夷戮也，物過剩而當殺。嗟夫，艸木無情，有時飄零。人爲動物，惟物之靈。百憂感其心，萬事勞其形。有動乎中，必搖其情。而況思其力之所不及，憂其智之所不能，宜其渥然丹者爲槁木，黟然黑者爲星星。奈何非金石之質，欲與艸木而爭榮。念誰爲之戕賊，亦何恨乎秋聲。童子莫對，垂頭而睡。但聞四壁蟲聲唧唧，如助予之歎息。（宋・歐陽永叔「秋聲賦」，『古文眞寶後集』巻一）

【作例】

「歐陽公秋夜燈下に書を讀み獨樂乃圖」［其一］（有臺藤應著、旭輝齋畫圖『畫本古文眞寶後集』初編巻二、嘉永三年［1850］玉山堂・學而堂刻本）

↓「月白風清く山色凄々たる圖」［其二］、「又敵に赴くの兵の、枚を銜みて疾走し」［無題、其三］

おうようこう、ぶんちゅうひんかくしょうたい、くりやものしゅこうちょうみのず
歐陽公、文中賓客招請、厨僕酒肴調味乃圖

宋の歐陽修撰「憎蒼蠅賦」を図解する挿絵である。全部で四枚あり、これは「其二」である。

【出典】

又如峻宇高堂，嘉賓上客，沽酒市脯，鋪筵設席，聊娛一日之餘閒，奈爾衆多之莫敵。或集器皿，或屯几格。或醉淳酎，因之投溺，或投熱羹，遂喪其魄。諒雖死而不悔，亦可戒夫貪得。尤忌赤頭，號爲景跡，一有霑汙，人皆不食。奈何引類呼朋，搖頭鼓翼，聚散倏忽，往來絡繹。方其賓主獻酬，衣冠儼飾，使吾揮手頓足，改容失色。於此之時，王衍何暇於清談，賈誼堪爲太息。此其爲害者二也。（歐陽修「憎蒼蠅賦」，『古文眞寶後集』巻一）

【作例】

「歐陽公、文中賓客招請、厨僕の酒肴調味の圖」［其二］（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻四、嘉永三年［1850］玉山堂・學而堂刻本）

↓「蒼蠅の人に仇する、憎むべし、孔子も周公を夢見る事能はざるべしの圖」［其一］、「主客歓宴興酣る時、饗應乃魚肉蠅の爲に味ひを損じ、賓客不興主人汗面の圖」［其三］、「主人宴席の恥辱を憤り、厨入って厨僕を叱咤する圖」［其四］

おうようしゅう　歐陽修

歐陽修（1007～1072）、字は永叔、号は醉翁、六一居士といい、盧陵（江西省吉安）の人である。四歳の頃父親を亡くした。母親鄭氏が再婚せず、細腕で歐陽修を育てて教育した。家が貧しくて、筆がなく、荻の茎を持って地面で書を学んだ。幼い頃大変聡明で、書物をすらすらと読めた。成人になってから、唐の韓愈の文章を読んで、感心した。一生懸命に勉強して、韓愈と肩を並べたいと志した。科挙の試験を受け、南宮の第一位の成績であった。甲科に抜擢され、西京の推官に任命された。詩文をもってその名は世に知れ渡った。また詔書を受け、『新唐書』を編纂した。著書に『欧陽文忠公集』がある。

【出典】

歐陽修，字永叔，盧陵人。四歳而孤，母鄭守節，自誓親誨之學。家

六

貧至以荻畫地學書，幼敏悟過人，讀書輒成誦。及冠，嶷然有聲。宋興且百年，而文章體裁猶仍五季餘習。鏤刻駢偶，淟涊弗振，士因陋守舊，論卑氣弱。蘇舜元、舜欽、柳開、穆修輩咸有意作而張之而力不足。修游隨得唐 韓愈遺藁於廢書篋中，讀而心慕焉。苦志探頤至忘寢食，必欲并轡絕馳而追與之並。舉進士，試南宮第一，擢甲科，調西京推官，始從尹洙游，爲古文議論當世事迭，相師友與梅堯臣游爲歌詩相倡和，遂以文章名冠天下。（元・脫脫等撰『宋史』巻三百十九，列傳第七十八）

【作例】

「荻畫字書」（元・虞韶編『新刊大字分類校正日記故事大全』巻一、嘉靖二一年［1542］序刊本）

「先儒歐陽子」（明・呂維祺編『聖賢像讃』巻三、崇禎五年［1632］自序刻本）

「歐陽文忠公」（清・上官周繪『晩笑堂畫傳』巻二、乾隆八年［1743］刻本）

「歐陽修」（清・顧沅輯、孔繼堯繪『吳郡名賢圖傳讃』巻二、道光七年［1827］序刻本）

「歐陽修」（狩野探幽繪『詩仙堂志』詩仙巻圖録、萬治二年［1695］序刊本）

おうようしゅうのはは　歐陽修母

歐陽修の母親は鄭氏である。子供の教育に厳しいことでよく知られる。

【出典】

具官歐陽修母，嚴稱於天下，能教其子，爲時名臣，協于詢謀，進斷國論。雖祿養不及，而饋享有加。啓封大邦，於禮爲稱。尚其幽穸，知享此榮。（宋・王安石「母」，宋・呂祖謙撰『宋文鑑』巻三十八）

【作例】

「歐陽修母」（馬場信意『分類畫本良材』巻四、正徳五年［1715］須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板）

おうようちゅうこう　歐陽忠公

→「歐陽修」

【作例】

「欧陽文忠公」（清・上官周繪『晩笑堂畫傳』、乾隆八年［1743］刻本）

おうようめい　王陽明

王陽明（1472～1528）はすなわち王守仁のことである。王守仁、字は伯安、号は陽明といい、余姚（浙江省余姚）の人である。母親は彼を妊娠して十四カ月になってやっと産んだ。祖母は神様が雲から子供を送ってきたという夢を見たので、雲と名付けた。五歳になっても言葉ができなかった。異人が彼を撫でて「守仁」と名前を変えると、はじめて言えるようになった。十五歳の頃、居庸関と山海関を訪れ、塞外の山や川の地形をよく観察した。弱冠にして科挙の試験を受けた。学問が大変進んだ。軍事のことを議論するのは好きである。また射ることも得意である。弘治十二年（1499）、進士になった。正徳元年（1506）劉瑾が戴銑等二十人余りを逮捕した。守仁は彼らを助けるために上奏文を出した。そのため、劉瑾の逆鱗に触れ、廷杖四十の刑を受け、貴州龍場駅丞に左遷された。龍場には山が多く、樹木が少なく、苗族や獠民が雑居しているところである。守仁は彼らの風俗を尊重しながら、文明開化までの道を導いた。そのため、地元の夷人が相次ぎ木を倒して小屋を作り、守仁に住んでもらった。守仁は龍場にいた頃、書物がほとんどないため、毎日瞑想しているうちに突然悟った。それはいわゆる「龍場大悟」であった。それをきっかけとして彼が「陽明学」の

体系を完成させた。具体的にいうと、「格物致知」は心に求めるべきという心学である。そのため、人間はまず「良知」を持たなければならないということである。嘉靖六年に病死した。年は五十七歳であった。

【出典】

王守仁，字伯安，餘姚人。［中略］守仁娠十四月而生。祖母夢神人自雲中送兒下，因名雲。五歲不能言，異人拊之，更名守仁乃言。年十五，訪客居庸 山海關時關出塞縱觀山川形勝。弱冠舉鄉試。學大進，顧益好言兵且善射。登弘治十二年進士，使治前威寧伯 王越葬還而朝議，方急西北邊，守仁條八事上之，尋授刑部主事。決囚江北，引疾歸。起補兵部主事。正德元年冬，劉瑾逮南京給事中御史戴銑等二十餘人。守仁抗章救，瑾怒，廷杖四十，謫貴州 龍場驛丞。龍場萬山叢薄，苗獠雜居。守仁因俗化導，夷人喜相率伐木爲屋，以棲守仁。瑾誅，量移廬陵知縣。入覲遷南京刑部主事，吏部尚書楊一清改之驗封，屢遷考功郎中，擢南京太僕少卿，就遷鴻臚卿。［中略］守仁天姿異敏，年十七謁上饒 婁諒，與論朱子格物，大指還家。日端坐講讀五經，不苟言笑。游九華歸，築室陽明洞中。泛濫二氏學，數年無所得。謫龍場窮荒，無書，日繹舊聞，忽悟格物致知，當自求諸於心，不當求諸事物。喟然曰，道在是矣。遂篤信不疑。其爲教，專以致良知爲主。謂宋 周 程二子，後惟象山 陸氏，簡易直捷，有以接孟氏之傳。而朱子集注或問之類，乃中年未定之說。學者翕然從之。世遂有陽明學云。（清・張廷玉等撰『明史』巻一百九十五，列傳第八十三）

【作例】

「先儒王子」（明・呂維祺編『聖賢像讃』巻三、崇禎五年［1632］自序、刻本）

↓「王文成」

おうらん　王覽

王覽（206～278）、字は元通といい、瑯邪臨沂（山東省臨沂）の人である。義理の母親の朱氏は、兄の王祥をひどく扱い、弟の覽を可愛がる。しかし、覽が子供のころ、祥が母にひどく殴られるのを見て、泣きながら祥を抱きついた。もう少し大きくなったら、時々母親を諌める。それで母親は少し暴虐を控えるようになった。朱氏はいつも因縁をつけて祥を叱るが、覽はいつも祥を守った。朱氏はまた祥の妻を虐待するが、今度は覽の妻は祥の妻を守る。朱氏が困ってしまって、ついにやめた。祥は父親を失ってから、ようやく親孝行の名声を上げた。朱氏は非常に嫉妬して、密かに毒を酒に入れ、祥を毒殺しようとした。覽がそれを知り、直ちに盃を祥から奪おうとした。だが、祥も不審に思い盃を与えなかった。そのうち朱氏がいきなり盃を奪った。それ以来、朱氏が祥に与えた食事を覽が先に試食するようになった。朱氏は覽が死ぬのを恐れ、仕方なく思いとどまった。覽は祥につぎ親孝行で有名である。祥が出世してから、覽も郡の招きに応じ、司徒西曹掾、清河太守などを歴任した後、晋の武帝の咸寧（275～279）の初めころ、覽が上奏文を出し、勇退を願った。帝がそれを許し、銭二十万や寝具などを賜った。また御用の医者を派遣し病気の治療や薬の投与を行った。覽が太中大夫をもって帰郷し、咸寧四年（278）に亡くなった。七十三歲であった。諡は貞という。

【出典】

覽字元通。母朱。遇祥無道。覽年數歲，見祥被楚撻，輒涕泣抱持。至于成童，每諫其母，其母少止凶虐。朱屢以非理使祥，覽輒與祥俱。又虐使祥妻，覽妻亦趨而共之。朱患之，乃止。祥喪父之後，漸有時譽。朱深疾之，密使酖祥。覽知之，徑起取酒。祥疑其有毒，爭而不與。朱遽奪反之。自後朱賜祥饌，覽輒先嘗。朱懼覽致斃，遂止。覽

八

孝友恭恪，名亞於祥。及祥仕進，覽亦應本郡之召，稍遷司徒西曹掾、清河太守。五等建，封即丘子，邑六百戶。泰始末，除弘訓少府。職省，轉太中大夫，祿賜與卿同。咸寧初，詔曰，覽少篤至行，服仁履義，貞素之操，長而彌固。其以覽爲宗正卿。頃之，以疾上疏乞骸骨。詔聽之，以太中大夫歸老，賜錢二十萬，牀帳薦褥，遣殿中醫療疾給藥。後轉光祿大夫，門施行馬。咸寧四年卒，時年七十三，謚曰貞。（唐・房玄齡撰『晉書』巻三十三，列傳第三）

【作例】

「王覽」（橘有税『繪本故事談』巻七、正徳四年［1714］稱觥堂刊本）

おうらんゆうてい　王覽友弟

→「王覽」

【出典】

晉 王覽字玄通，母朱遇兄祥無道。覽年數歲，見祥被楚撻，輒涕泣抱持。每諫其母，母少止凶虐。朱每以非理使祥，覽輒與俱。又虐使祥妻，覽妻亦趍而共之。朱患之乃止。祥喪父，後漸有時譽。朱深疾之，密使酖祥。覽知之，徑起取酒，祥疑之有毒，爭而不與。朱遽奪反之。自後朱賜祥饌，覽輒先嘗。覽孝友恭恪，名亞於祥。仕至光祿大夫，門施行馬。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「王覽友弟」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻四、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

おうりょうのはは　王陵母

王陵（？～前181）は秦の末の沛（江蘇省沛）の人である。劉邦が兄として慕っていた。劉邦が反乱を起こして咸陽を陥落させた際、王陵も数千人を集め、南陽にいた。しかしながら、王陵は劉邦の軍勢に加わる気持ちはなかった。後に、項羽が王陵の母親を人質にして、王陵を招きたかった。王陵の母親は王陵の使者に対し、「漢王劉邦に仕えなさい。私はこれで死を以て見送る。」と言い終わって、剣で自殺した。項羽がそれを知り、立腹して王陵の母親を茹でた。そのため、王陵はついに劉邦について行くことを決心した。

【出典】

王陵者故沛人。始爲縣豪。高祖微時，兄事陵。陵少文任氣、好直言。及高祖起沛、入至咸陽。陵亦自聚黨數千人，居南陽，不肯從沛公。及漢王之還攻項籍，陵乃以兵屬漢。項羽取陵母置軍中。陵使至，則東鄉坐陵母，欲以招陵。陵母既私送使者，泣曰，爲老妾語陵，謹事漢王。漢王長者也，無以老妾故持二心。妾以死送使者。遂伏劍而死。項王怒烹陵母。陵卒從漢王定天下。（漢・司馬遷撰『史記』巻五十六、陳丞相世家第二十六）

【作例】

「王陵母」（明・汪氏輯、仇英實甫補圖『列女傳』巻五、乾隆四四年［1779］序刊本）

「王陵母」（馬場信意『分類畫本良材』巻四、正徳五年［1715］須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板）

おうれつ　王烈

王烈、字は彦方といい、太原（山西省太原）の人である。若い頃、彼は陳寔に師事した。郷里にある人が牛を盗んだが、主人に捕まった。その牛泥棒は主人に「どんな処罰も受けるが、王彦方だけは知られたくない」と頼んだ。王烈がそれを知り、一端の生地を贈った。後にある老人が剣を道に落とした。そこを通った人が老人を待っていた。老人がその人の名前を聞き、王烈に告げた。王烈が調べたら、その牛泥棒であった。

【出典】

王烈，字彦方，太原人也。少師事陳寔，以義行稱。鄉里有盗牛者，主得之，盗請罪曰，刑戮是甘，乞不使王彦方知也。烈聞而使人謝之，遺布一端。或問其故，烈曰，盗懼吾聞其過，是有恥惡之心。既懷恥惡，必能改善，故以此激之。後有老父遺劒於路，行道一人見而守之。至暮，老父還，尋得劒，怪而問其姓名，以事告烈。烈使推求，乃先盗牛者也。（南朝宋・范曄撰『後漢書』巻八十一，獨行列傳第七十一）

【作例】

「王烈」（普斎岡子雉著述［大岡普斎］、橘辨次守国［橘辨次］圖畫『畫典通考』巻七、享保一二年［1727］寶文堂刊本）

おうろう　王老

王老は村に住んでいるが、道教を好む。ある年寄りの道士が彼を訪ね、一ケ月ぐらい滞在した。突然体中に潰瘍が起き、王老に頼んだ。「酒を数本もらいたい。酒に漬かせると、治るだろう。」と。そこで王老が酒を甕にいっぱい入れた。道士は甕の中に座って三日間経ってやっと出てきた。髪の毛や髭は皆黒くなり、顔は少年のようになった。道士は王老に言った。「この酒を飲むと、仙人になれる。」と。時にちょうど収穫の季節で、皆脱穀の作業をしているところである。王老の家族全員が酒を飲んだら、あっという間に酔っぱらってしまった。そして突然風が吹き始め、雲が渦巻き始めた。王老の家族と家屋とがともに空に上がった。その時、村の人々はまだ空の中に脱穀の音が聞こえてきたという。

【出典】

王老，坊州宜君縣人也。居於村野，頗好道，務行陰德爲善。其妻亦同心不倦。一旦，有藍縷老道士造其門，王老與妻俱延禮之。居月餘間，日與王老言談杯酌，甚相歡洽。俄忽患遍身惡瘡，王老乃求醫藥看療，益加勤切。而瘡日甚一日。迨將逾年，道士謂王老曰，此瘡不煩以凡藥治療，但得數斛酒，浸之自愈。於是王老爲之精潔釀酒。及熟，道士言以大瓮盛酒，吾自加藥浸之。遂入瓮，三日方出。鬚髮俱黑，復少年，肌若凝脂。王老合家視之驚異。道士謂王老曰，此酒可飲，能令人飛上天。王老信之。初瓮酒五斛，餘及窺存三二升耳。清冷香美，異於常醪。其時方持麥，王老與妻子并持麥人共飲，皆大醉。道士亦飲，云，可上天否。王老曰，願隨師所適。於是祥風忽起，綠雲如蒸。屋舍草樹、全家人物、雞犬一時飛去，空中猶聞打麥聲。數村人共觀望驚異，惟貓鼠棄而不去，風定，其傭力持麥人乃遺在別村樹下，後亦不食，皆得長生。宜君縣西三十里有昇仙村在焉。（唐・沈汾『續仙傳』巻上）

【作例】

「王老」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻三、萬暦二八年［1600］玩虎軒刊本）

「王老」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』三、元禄二年［1689］寂照寺蔵板）

「王老」（馬場信意『分類畫本良材』巻五、正德五年［1715］須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板）

おしどり　鴛鴦

鴛鴦はいつも雌雄一緒にいる。若し人がその中の一羽を取った場合、もう一羽が悲しくて死んでしまう。伝えるところによると、雄が鳴くと鴛という声で、雌が鳴くと鴦という声である。

【出典】

鴛鴦，匹鳥有思者也。雌雄未嘗相離。人得其一，一思而死。故謂之匹鳥。俗云，雄鳴曰鴛，雌鳴曰鴦。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸二巻）

【作例】

「鴛鴦」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「鴛鴦」（中村惕斎編『訓蒙圖會』鳥獸一巻、寛文六年［1666］山形屋刊本）

「鴛鴦」（『繪本初心柱立』二、正徳五年［1715］新板、寶暦一一年［1761］再刻、小林喜右衛門・今井七郎兵衛刊本）

「鴛鴦」［尚信筆］（法橋春卜畫『和漢名筆畫本手鑒』、享保五年［1720］序・跋、前川文榮堂梓、文榮堂蔵板）

「鴛鴦」（橘守国畫圖『運筆麄畫』巻上、寛延一年［1748］序、弘化一年［1844］熙春堂蔵板、須原屋等發行）

「鴛鴦」［土佐刑部筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』二巻、寛延二年［1749］序、寶文堂刻本）

「鴛鴦」（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』、明和三年［1766］層山堂刻本）

「鴛鴦」（蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年［1794］須原屋板）

「鴛鴦」［倣陸包山］（老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』上巻、享和三年［1803］序、文化六年［1809］叙、青藜閣刻本）

「鴛鴦」（『職巧雛型錦袋畫叢』、文政一一年［1828］文花堂刻本）

「鴛鴦」（葛飾爲斎繪『萬物圖解爲斎畫式』二帙、元治一年［1864］序、須原屋等刊本）

「鴛鴦」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』三編、明治一二年［1879］寶集堂刊本）

「鴛鴦」（滝澤清畫『潛龍畫譜』花鳥之部、明治一二年［1879］松崎半造出版）

「鴛鴦圖」（古筆了意撰『探幽臨畫』巻上、皓月堂梓）

「無題」［鴛鴦］（木風翁文紹編『古今名家畫苑』初編、須原屋等刊本）

おうじゅうえつし　王充閲市

後漢の王充（27～91）は、字は仲任といい、会稽の上虞（浙江省上虞）の人である。充が幼い頃両親を亡くした。彼は大きくなってから上京し、太学に入り班彪に師事するようになった。充が貧しく本を買う金がないので、よく洛陽の書肆に行って立ち読みした。充は一度読んだ本の内容が忘れない。遂に博学になった。充に『論衡』八十五篇ある。（南朝宋・范曄撰『後漢書』巻四十九、列傳第三十九）

【出典】

後漢 王充字仲任，會稽 上虞人。家貧無書。常遊洛陽市肆，閲所賣書。一見輒能誦憶，遂博通衆流百家之言。仕郡爲功曹。充好論說，始若詭異，終有理實。以爲俗儒守文，多失其眞。乃閉門潛思，絕慶弔之禮，戶牖牆壁，各置刀筆，著論衡八十五篇，釋物類同異，正時俗嫌疑。刺史辟爲從事，轉治中，自免還家。肅宗詔公車徵不行。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「王充閲市」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻四、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

おに　鬼

【作例】

「鬼」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］保壽堂・養心堂刻本）

おりょうじへい　於陵辭聘

於陵の子終という人が賢人である。楚王がそれを聞き、宰相になってほしいと思い、使者に黄金を百鎰持参させて招聘に行かせた。子終

はまず妻の気持ちを聞いた。「王様は私に宰相になってほしい。今日応じたら、明日にも四匹の馬の馬車に乗れる。また大広間で食事できる」と。妻は「四匹の馬の馬車に乗っていても、膝がぎりぎり入るところだ。大広間で食事できても同じ肉の味に過ぎない。それより楚のことを心配して大丈夫か。世の中が混乱しているので、私はあなたの命を心配している。」と。すると、子終が使者に断ったという。

【出典】

古列女傳，楚王聞於陵子終賢，欲以爲相，使使者持金百鎰往聘之。子終入謂妻曰，王欲以我爲相。今日爲相，明日結駟連騎，食方丈於前。可乎。妻曰，夫子織屨以爲食。非與物無治也。左琴右書，樂亦在其中矣。夫結駟連騎，所安不過容膝。食方丈於前，所甘不過一肉。今以容膝之安，一肉之味，而懷楚國之憂，其可乎。亂世多害。妄恐先生之不保命也。於是子終出謝使者，遂相與逃，而爲人灌園。高士傳曰，陳仲子字子終，齊人。辭母兄將妻適楚，居於陵，自號於陵仲子。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「楚於陵妻」（漢・劉向撰、晋・顧愷之圖畫『古列女傳』巻二）
「於陵辭聘」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻八、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

おんこう　温公

→「司馬温公」

【作例】

「温公」（老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』上巻、享和三年［1803］序、文化六年［1809］叙、青藜閣刻本）

おんじょせつぼ　温舒截蒲

前漢の路温舒（生卒不詳）は字が長君といい、鉅鹿の東里（河北省平郷）の人である。父親は里門の守衛で、舒に羊を放牧させる。温舒は沼から蒲を切り取り、その葉を文書の形にし、その上で文章の練習をした。少し上達すると、応募して刑務所の下級官吏になった。さらに法律を学び、温舒は刑務所の管理職まで昇進した。後に『春秋』を学び、孝廉として推薦され、彼が山邑丞に任用された。漢宣帝（前74～前49在位）の頃、温舒が臨淮太守に抜擢された。在任中亡くなった。（漢・班固撰『漢書』巻五十一、賈鄒枚路傳第三十一）

【出典】

前漢路温舒字長君，鉅鹿東里人。父爲里監門。使牧羊。温舒取澤中蒲，截以爲牒，編用寫書，稍習善。求爲獄小吏，因學律令，轉爲獄史。縣中疑事皆問焉。太守行縣，見而異之，署決曹史。又受春秋通大義。舉孝廉，爲山邑丞。宣帝時遷臨淮太守，治有異跡。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「温舒截蒲」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻五、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

か行（一）

が　鵞

鵞の額がこぶのようで、首が長く、よく鳴く。昔の書道を習う者はその首の動きを見て、筆の運び方を練習する。故に王羲之は鵞が好きだというわけである。

【出典】

鵞額如瘤，長脰，善鳴。又善旋轉。其項古之學書者法以動腕。羲之

好鶩者，以此有行列。故兵有鶩鸛之陳。其性頑而傲。蓋鶩峩首似傲，故曰傲也。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一巻）

【作例】

「鶩」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「鶩」（中村惕斎撰『訓蒙圖會』巻十三、寛文六年［1666］叙、山形屋（山形市郎右衛門）刊本）

「鶩」（葛飾戴斗畫『花鳥畫傳』、嘉永二年［1849］叙刊本、須原屋新兵衛、河内屋藤兵衛等刊行）

かい　槐

槐はもと河南の濕地に生えていたが、今はどこでも見られる。『爾雅』によると、葉が大きく黒いのは「懐槐」と呼ばれ、花が昼閉じ夜咲くのは「守宮槐」と呼ばれ、葉が細く青緑なのは「槐」と呼ばれるという。

【出典】

槐實生河南平澤，今處處有之。其木極高大者。謹按爾雅，槐有數種，葉大而黑者，名懐槐。晝合夜開者，名守宮槐。葉細而青緑者，但謂之槐。四月、五月開花，六月、七月結實，十月採老實入藥。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木九巻）

【作例】

「槐」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木九巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「槐」（中村惕斎撰『訓蒙圖會』巻十九、寛文六年［1666］叙、山形屋（山形市郎右衛門）刊本）

かいえん　介琰

介琰という人は誰なのかはよくわからないが、建安の方山に住んでいて、白羊公に師事した。彼が道を得て体の形を隠すことができる。よく東海に行き来する。秣陵を通った際、呉の皇帝孫権に会った。帝は琰を留め、彼のために宮殿を建てた。一日中何回も人を派遣して挨拶に行く。琰は子供になったり、翁になったりして、食事もせず、贈り物も受け取らない。帝がその隠形術を学びたいが、琰は帝が欲があるので、数か月が経っても教えない。帝が怒って琰を縛り付けた。兵士たちに弓で射るよう命じた。射た後、縛りの縄だけは残っているが、琰は行方不明であった。

【出典】

介琰者，不知何許人也。住建安 方山。從其師白羊公。杜受玄一無爲之道，能變化隱形。嘗往來東海，暫過秣陵，與吳主相聞。吳主留琰，乃爲琰架宮廟。一日之中，數遣人往問起居。琰或爲童子，或爲老翁。無所食啗，不受餉遺。吳主欲學其術，琰以吳主多內御，積月不教。吳主怒，敕縛琰。著甲士引弩射之。弩發，而繩縛猶存，不知琰之所之。（晉・干寶撰『搜神記』巻一）

【作例】

「介琰」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻四、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1753］白雲館刻本）

かいおうふか　海鷗不下

【作例】

「海鷗不下」（大岡春卜畫『和漢故事卜翁新畫』巻五、寛延四年［寶暦一］序、寶暦三年［1753］刊本）

かいかいこく　回回國

回回国には城、宮殿、田圃、家畜、市場などがあり、すべては江南

の風土と同じである。

【出典】

回回國有城池、宮室、田、畜、市，列與江淮風土不異。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四巻）

【作例】

「回回國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「回回國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］寶文堂刊本）

がいかのなげき　垓下嘆

↓「項羽」

かいけいかきょ　会稽霞舉

【出典】

世說曰，海西時，諸侯每朝，朝堂猶暗。唯會稽王來，軒軒如朝霞舉。會稽王謂道子也。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「会稽霞擧」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かいせいず　魁星圖

【作例】

「魁星圖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「魁星圖」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］寶文堂刊本）

かいこつ　回鶻

回鶻の祖先は匈奴である。隋の頃突厥に臣と称していた。隋の煬帝の大業頃（605～616）、回鶻は回紇と自称していたが、唐の德宗（779～805在位）の頃、名を回鶻に変えた。

【出典】

回鶻偉元即回紇，其先本匈奴，凡十五種。至隋曰韋紇，臣于突厥。突厥資其財，力雄北荒。大業中，自稱回紇，子曰菩薩。突厥亡，惟回紇最强。菩薩死，其酋與諸部攻薛延陀殘之，并有其地，遣使若獻欵中國。嘗自以其鷙捷如鶻，至唐德宗時，立請易回紇爲回鶻偉元，老回鶻之轉聲也。其地本在哈剌和林，即今之和寧路也。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二巻）

【作例】

「回鶻」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「回鶻」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］寶文堂刊本）

かのうおう　夏禹王

【作例】

「夏禹王」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物一巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「夏禹王」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］寶文堂刊本）

↓「禹王」

かいし　海市

登州（山東省蓬莱）の海に時には雲があり、空に宮殿や城や人物や馬車などがはっきり見える。そういう現象は「海市」という。また蛟や蜃の気の説もあり、かつて欧陽修が高唐県（山東省高唐）を通った際、駅舎の夜中に鬼神が空を通り、馬車や人畜の音が聞こえる。地元の老人たちに聞くと、それは「海市」という。すなわち「蜃気楼」のことである。

【出典】

登州海中時有雲氣，如宮室、臺觀、城堞、人物、車馬，冠蓋歴歴可見，謂之海市。或曰蛟蜃之氣所爲，疑不然也。歐陽文忠曾出使河朔，過高唐縣，驛舍中夜有鬼神自空中過，車馬、人畜之聲一一可辨，其說甚詳，此不具紀。問本處父老，云二十年前嘗晝過縣，亦歴歴見人物，土人亦謂之海市，與登州所見大略相類也。（宋・沈括撰『夢溪筆談』巻二十一）

【作例】

「海市圖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理五巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「海市」（普斎岡子雉著述［大岡普斎］、橘辨次守国［橘辨次］圖畫『畫典通考』巻七、享保一二年［1727］寶文堂刊本）

かいしゅくけんせんにあう　解叔謙遇仙

解叔謙は字が楚梁といい、雁門（山西省雁門）の人である。彼の母親は病気になったため、叔謙は夜中に庭で祈った。突然空中から仙人の声が聞こえて、「この病気は丁公藤漬けた薬酒を飲めば、すぐ治る」という。叔謙は宜都郡の山中に入り、ある老人に出会い、老人に四本の丁公藤をもらい、さらに薬酒の漬け方を教えてもらった。彼の母親がその薬酒を飲むと、すぐ治ったという。

【出典】

解叔謙字楚梁，雁門人也。母有疾，叔謙夜於庭中稽顙祈福，聞空中語云，此病得丁公藤爲酒便差。卽訪醫及本草注，皆無識者。乃求訪至宜都郡，遙見山中一老公伐木，問其所用，答曰，此丁公藤，療風尤驗。叔謙便拜伏流涕，具言來意。此公愴然，以四段與之，并示以漬酒法。叔謙受之，顧視此人，不復知處。依法爲酒，母病卽差。（唐・李延壽撰『南史』巻七十三，列傳第六十三）

【作例】

「解叔謙遇仙」（貝原先生遺稿、浦川公左畫圖『續二十四孝繪抄』、天保一三年［1842］、嵩山房・宋榮堂合梓）

かいぞう　介象

介象は会稽（浙江省紹興）の人で、字が元則という。五経に精通し、百家の文章を博覧し、文章が得意であった。ひそかに道家の修行し、東嶽に入った。そこでいろいろな方術を覚えた。かつて介象が呉の王様と刺身は何が一番上等なのかを議論したことがある。象が「鱸が一番上等だ」と言った。王様が「この魚は海の中にいる。しかし手に入れないだろう」と言った。象が「手に入れる」と答えた。そこで象が人に殿中に池を作らせ、水を一杯注ぐ。すると象が餌を持って釣り始めた。しばらくすると鱸を釣れた。王様が驚いて喜んだ。「食べられるか」と象に聞いた。象が「わざわざ王様のためにとったので、もちろん食べられる」と答え、料理人に切らせた。王様が「生姜があると美味しいな。しかし蜀の使者が来ないので、間に合わないかな。どうやって手に入れるか」と聞いた。象が「簡単だ。一人を遣って、五千文を与えればいい」と答えた。そこで象が一つの符（道教の呪文）を書き、その人を杖に乗らせ、あっという間に成都に着いた。その人が生姜を買って帰ったときに、ちょうど刺身ができたところである。

【出典】

介象者，字元則，會稽人也。學通五經，博覽百家之言，能屬文。陰修道法，入東嶽，受氣禁之術，能茅上燃火煮雞，雞熟而茅不燋。能令一里內不炊不蒸，雞犬三日不鳴不吠。能令一市人皆坐不能起，能隱形變化爲草木鳥獸。［中略］與先主共論鱠魚何者最上，象曰，鯔魚爲上。先主曰，此魚乃在海中，安可得乎。象曰，可得耳。但令人於殿中庭方埒，者水滿之。象卽索釣餌起釣之，垂綸於埒中，不食頃，得鯔魚。先主驚喜，問象曰，可食否。象曰，故爲陛下取作鱠，安不可食。仍使厨人切之。先主問曰，蜀使不來，得薑作鱠至美，此間薑不及也。何由得乎。象曰，易得耳。願差一人，并以錢五千文付之，象書一符，以著竹杖中，令其人閉目騎杖，杖止便買薑。買薑畢，復閉目。此人如言騎杖，須臾，已到成都，不知何處，問人，言是蜀中也。乃買薑。於時吳使張溫在蜀，從人恰與買薑人相見，於是甚驚，作書寄家。此人買薑還，厨中鱠始就矣。（晉・葛洪撰『神仙傳』巻九）

【作例】

「介象」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻三、萬暦二八年［1600］刊本）

「介象」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』三、天明四年［1784］寂照寺蔵板）

かいち　獬豸

獬豸は東望山におり、神獣である。羊のような体で、一角四足である。王者の訴訟が公平であれば、現れる。

【出典】

東望山有獬豸者，神獸也。堯前有之，能觸邪。狀如羊，一角四足，王者獄訟，平則至。御史臺故事云，御史法冠一名獬豸，神羊也，有一角，楚王嘗獲之。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』鳥獸三巻）

【作例】

「獬豸」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸三巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「獬豸」（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻九上、享保五年［1720］稱觥堂板、明和七年［1770］須原屋・柏原屋再板）

かいどう　海棠

海棠は三種類があり、「貼梗」、「西府」、「垂絲」という。蜀と西州によくあるので、「西府」と呼ばれる。

【出典】

海棠，河南者佳。李賛皇花木記云，凡今草木，以海爲名者，悉從海外來。此棠以海名也，有三種。曰貼梗，曰西府，曰垂絲。爲蜀西州盛稱，故有西府之名。彭淵材五恨，一謂海棠無香，惟昌州獨香。子美母名海棠，故集中無海棠詩。明皇以比太眞，太眞卯酉未醒，扶掖而至。明皇笑曰，此是海棠睡未足耳。欲海棠花鮮而盛，宜於冬至日蚤以糟水澆其根下，鐵梗亦然。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二巻）

【作例】

「海棠」（明・王圻、王思義『三才圖會』草木十二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「海棠」（中村惕斎『訓蒙圖會』巻十九、寛文六年［1666］山形屋山形市郎右衛門刊本）

「海棠」（『後素畫譜』天保三年？［壬辰閏月］、河内屋喜兵衛等刊行本）

「海棠」（『繪本初心柱立』三、正徳五年［1715］新板、宝暦一一年［1761］再刻、小林喜右衛門・今井七郎兵衛刊本）

→「海棠花」

かいどうか　海棠花

↓「海棠」

【作例】

「海棠花」（橘守国『繪本直指寶』巻六上、延享元年［1744］叙、稱觥堂刊本）

かいどうのねむり　海棠之睡

海棠の眠りは玄宗帝が楊貴妃の酔態を形容する言葉である。

↓「海棠」

【出典】

東坡作海棠詩曰，只恐夜深花睡去，更燒銀燭照紅妝。事見太眞外傳。曰，上皇登沉香亭，詔妃子，妃子時卯醉未醒，命力士使侍兒扶掖而至。妃子醉顏殘妝，鬢亂釵横，不能再拜。上皇笑曰，是豈妃子醉，眞海棠睡未足耳。（宋・彭乘撰『墨客揮犀』巻四）

かいば　海馬

『山海経』によると、海馬が北海の獣である。形が馬のようでよく走る。また駒駮というのも馬のよく走る種類であり、すなわち海馬のことであるという。なお『隋書』によると、西域に吐谷渾（トヨクコン、異民族の首領の名前である。ここではその民族のことを指す）に青海があり、中には小さい山がある。冬になると、牝馬をそこに放牧すると、龍の種を得られるという。かつてペルシャの馬をそこに放牧したら、生まれた馬が一日千里を走れる。故に海馬という。

【出典】

海馬，山海經云，北海内獸，狀如馬，又善走，故服色之有取於海馬者，以善走也。或云駒駮亦馬之善走者，卽海馬。又隋書云，西域土谷渾有青海，中有小山，其俗至冬冰合，輒放牝馬於其上，言得龍種。嘗得波斯馬放入海，因生驄駒，日行千里，故時稱海馬。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸三巻）

【作例】

「海馬」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸三巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「海馬」（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻九下、享保五年［1720］叙、明和七年［1770］跋、稱觥堂刊行、須原屋茂兵衛再板）

かいへい　懐丙

【作例】

「懐丙」［鉄牛を水槽で運ぶ］（普斎岡子雄著述［大岡普斎］、橘辨次守国［橘辨次］圖畫『畫典通考』巻五、享保一二年［1727］、大野市兵衛開版、須原屋茂兵衛賣場）

かいりんすひちょうのうえ　迴臨飛鳥上

唐の暢當の「登鸛鵲樓」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

迴臨飛鳥上，高出世塵間。天勢圍平野，河流入斷山。（暢當「登鸛雀樓」，清・彭定求等編『全唐詩』巻二百八十七）

【作例】

「回臨飛鳥上」（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］原刻、寛政六年［1794］再刻、有斐堂、玉樹堂刊本）

かいんけんしかそんのず　華陰県史家村の圖

『水滸伝』に王進と母親が高俅の迫害を逃れるために、家から逃げ出し、華陰県史家村にやってきた。この絵がその風景を描いている。

【作例】
「華陰県史家村の圖」［王進と老母］（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』後篇上、弘化五年［1848］不朽堂刊本）

かおしょうろちしん　花和尚魯智深

花和尚魯智深は『水滸伝』の豪傑の一人である。魯智深はもと魯達という名前であったが、鎮関西を殺したため、指名手配の身となった。身を隠すために、五台山の文殊院で僧侶になり、住職智真長老が彼に「智深」という戒名を与えた。「花和尚」は魯智深の綽名である。

【出典】
楊志道，不敢問師兄卻是誰，緣何知道洒家賣刀。那和尚道，洒家不是別人，俺是延安府　老種經略相公帳前軍官魯提轄的便是。爲因三拳打死了鎮關西，卻去五臺山淨髪爲僧。人見洒家背上有花繡，都叫俺做花和尚魯智深。（百二十回本『水滸傳』第十七回）

【作例】
「花和尚魯智深」（明・陳洪綬繪『水滸葉子』、天啓六年［1626］頃の刊本）
「魯智深・武松」（『水滸全圖』、杜先生菫爲之補圖、光緒六年［1880］刊本）
「魯智深」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分巻、天保六年［1835］和刻本）
「花和尚魯智深」（前北斎爲一老人畫『新編水滸畫傳』、文政一一年［1828］刻本）
「花和尚魯智深」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］序、萬極堂梓）
「花和尚魯智深」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編上、弘化五年［1848］不朽堂刻本）
「花和尚魯智深」（柳水亭種清著、葵岡北渓畫『水滸畫傳』、安政三年［1856］序、甘泉堂板）
「花和尚魯智深」（葛飾爲斎『萬物圖解爲斎畫式』初帙、元治一年［1864］序須原茂兵衛、山城屋佐兵衛刊本）
「花和尚魯智深」（江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年［1867］序、大橋堂梓・蔵板）

かかいつちをかついでおやのはかをつくる　賈會擔土作親墳

賈会は京兆の華原（陝西省銅川市耀州区）の人である。会の親が亡くなった後、会は自ら土を運び、墓を作った。そして墓の傍で小屋を建て住んでいた。そのため、彼が「関中の曾子」と呼ばれていたという。

【出典】
賈循者，京兆　華原人。其先家常山。父會，有高節，嘗稱疾不答辟署，里中號一龍。親亡，負土成墓，廬其左，手蒔松柏，時號關中　曾子。卒，縣人私謚曰廣孝徵君。（宋・歐陽修、宋祁撰『新唐書』巻一百九十二、列傳第一百一十七）

【作例】
「賈會擔土作親墳」（貝原先生遺稿、浦川公左畫圖『續二十四孝繪抄』、天保一三年［1842］、嵩山房・宋榮堂合梓）

かがく　華嶽

華嶽はすなわち西嶽、華山のことであり、五嶽の中の一つである。通常「西嶽華山」ともいう。華嶽が陝西省の華陰にある。伝えることによると、頂上に池があり、池に千葉の蓮華がある。その華を服用すると、仙人になる。故に華山という。

【出典】

華嶽在華陰。八月西巡守至于西嶽書經舜典。西嶽　華山蔡氏注。西傾朱圉，鳥獸至于太華禹貢。括地志云，太華在京兆華陰縣南孔疏。豫州其山鎮曰華山周禮職方氏。華山在今華陰職方氏注。僖公十五年晉賂秦河外列城五，南及華山左傳。華山，黃帝之所常遊與神會史記封禪書。太華之山削成而四方其高五千仞，其廣十里山海經。卽西嶽華山也。今在弘農　華陰縣西南，山形上大下小郭璞注。華之爲言獲也，萬物成熟可得獲也白虎通。（『陝西通志』巻八，雍正十三年序，欽定四庫全書史部）

按，華山，五嶽之西嶽也。在周官豫州其鎮山曰華山。華山記云，頂有池，生千葉蓮花，服之羽化，因曰華山。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理八巻、萬曆三七年刊本）

【作例】

「華嶽圖」（明・楊爾曾輯『海内奇観』巻一、萬曆三七年［1609］刊本）

「華嶽圖」（『名山圖』、崇禎六年［1633］墨繪齋刻本）

→「華山」

かがんさんげとうひ　火眼狻猊鄧飛

鄧飛は『水滸伝』の中の一人の豪傑で、綽名は「火眼狻猊」という。後に梁山泊に入った。

【出典】

戴宗問道，這兩箇壯士是誰，如何認得賢弟。楊林便道，這箇認得小弟的好漢，他原是蓋天軍　襄陽府人氏，姓鄧名飛。爲他雙睛紅赤，江湖上人都喚他做火眼狻猊。能使一條鐵鏈，人皆近他不得。（百二十回本『水滸傳』第四十四回）

【作例】

「鄧飛」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分巻、天保六年［1835］和刻本）

「火眼狻猊鄧飛」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］序、萬極堂梓）

「火眼狻猊鄧飛」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年［1848］不朽堂刻本）

「火眼狻猊鄧飛」（泉龍亭是正編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』三編、大橋堂梓、小田原屋又七板）

かぎ　賈誼

賈誼（前201～169）は洛陽の人である。十八歳の頃、よく詩を詠うことができ、郡の中によく知られる。後に呉廷尉の推挙によって漢の文帝に起用された。博士、太中大夫を歴任した。賈誼は文帝の厚い信頼を受け、いろいろの改革をすすめた。しかしながら、重臣たちの讒言を受け、遂に文帝の信頼を失い長沙に左遷され、長沙王の太傅になった。数年後、賈誼が文帝の信頼を取り戻し梁の懐王の太傅になった。しかしながら、懐王が落馬して事故死に遭った。そのため賈誼が憂鬱になり、数年後三十三歳の若さで亡くなった。

【出典】

賈生名誼，雒陽人也。年十八，以能誦詩屬書聞於郡中。吳　廷尉爲河南守，聞其秀才，召置門下，甚幸愛。孝文皇帝初立，聞河南守吳公治平爲天下第一，故與李斯同邑而常學事焉，乃徵爲廷尉。廷尉乃言賈生年少，頗通諸子百家之書。文帝召以爲博士。是時賈生二十餘歲，最爲少。每詔令議下，諸老先生不能言，賈生盡爲之對，人人各如其意所欲出。諸生於是乃以爲能，不及也。孝文帝說之，超遷，一歲中至太中大夫。賈生以爲漢興至孝文二十餘年，天下和洽，而故當改正朔，易服色，法制度，定官名，興禮樂，乃悉草具其事儀法，色

尚黄，數用五，爲官名，悉更秦之法。孝文帝初卽位，謙讓未遑也。諸律令所更定，及列侯悉就國，其說皆自賈生發之。於是天子議以爲賈生任公卿之位。絳、灌、東陽侯、馮敬之屬盡害之，乃短賈生曰，雒陽之人，年少初學，專欲擅權，紛亂諸事。於是天子後亦疏之，不用其議，乃以賈生爲長沙王太傅。［中略］居數歲，懷王騎，墮馬而死，無後。賈生自傷爲傅無狀，哭泣歲餘，亦死。賈生之死，時年三十三矣。（漢・司馬遷撰『史記』巻八十四，屈原賈生列傳第二十四）

【作例】

「賈太傅像」（清・顧沅輯『古聖賢像傳略』巻二、道光一〇年［1830］刊本）

「賈誼」（橘宗兵衛［有税］繪『繪本通寶志』巻五上、享保一四年［1729］稱觥堂刊本）

かぎきふく　賈誼忌鵬

『史記』や『漢書』によると、賈誼が漢文帝の末子長沙王の太傅になり三年になった頃、ある日、鴞（フクロウ）が飛んできた。楚の人はフクロウのことを「鵬」と呼んでいる。賈誼はその鳥の現れを忌み、自分が長生きできないと思ったという。

【出典】

賈生爲長沙王太傅三年，有鴞飛入賈生舍，止於座隅。楚人命鴞曰服。賈生既以適居長沙卑濕，自以爲壽不得長，傷悼之，乃爲賦以自廣。（漢・司馬遷撰『史記』巻八十四，屈原賈生列傳第二十四）

【作例】

「賈誼忌鵬」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻三、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かぎ、ちょうさにくだるみちしょうりゅうをよぎりむかしくつげんちゅうせいむなしくてきらにしずみしをいたみとぶらふのず
賈誼、長沙に降る道湘流を過り往昔屈原忠誠空しく汨羅に沈みしを悼み弔ふの圖

漢の賈誼の「弔屈原賦」（屈原を弔ふの賦）を図解する絵である。全部で二枚あり、これは「其一」である。

【出典】

恭承嘉惠兮，俟罪長沙。仄聞屈原兮，自湛汨羅。造託湘流兮，敬弔先生。（賈誼「弔屈原賦」，『古文眞寶後集』巻一）

【作例】

「賈誼長沙に降る道湘流を過り往昔屈原忠誠空しく汨羅に沈みしを悼み弔ふの圖」［其一］（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻一、嘉永三年［1850］刊本）

↓「賈誼文中潛龍乃圖」［其二］

かぎがぶんちゅうせんりょうのず　賈誼文中潛龍乃圖

賈誼の「弔屈原賦」（屈原を弔ふの賦）を図解する挿絵である。全部で二枚あり、これは「其二」である。

【出典】

襲九淵之神龍兮，沕淵潛以自珍。偃蟜獺以隱處兮，夫豈從蝦與蛭螾。所貴聖之神德兮，遠濁世而自臧。（賈誼「弔屈原賦」，『古文眞寶後集』巻一）

【作例】

「賈誼文中潛龍乃圖」［其二］（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻一、嘉永三年［1850］刊本）

↓「賈誼、長沙に降る道湘流を過り往昔屈原忠誠空しく汨羅に沈みしを悼み弔ふの圖」［其一］

がき　餓鬼

【作例】

「餓鬼」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］保壽堂・養心堂刻本）

かきん　華歆

華歆（157～231）、字は子魚といい、平原高唐（山東省禹城）の人である。はじめは郡の吏だったが、後に推挙され、郎中となった。魏の頃、御史大夫、相国を歴任した。魏の文帝の頃、司徒であり、魏の明帝の頃、太尉であった。博平侯に封ぜられ、死後敬侯に贈られた。

【出典】

華歆字子魚，平原 高唐人也。高唐爲齊名都，衣冠無不游行市里。歆爲吏，休沐出府，則歸家闔門。議論持平，終不毀傷人。同郡陶丘洪亦知名，自以明見過歆。時王芬與豪傑謀廢靈帝。語在武紀。芬陰呼歆，洪共定計，洪欲行，歆止之曰，夫廢立大事，伊、霍之所難。芬性疎而不武，此必無成，而禍將及族。子其無往。洪從歆言而止。後芬果敗，洪乃服。舉孝廉，除郎中，病，去官。靈帝崩，何進輔政，徵河南 鄭泰、潁川 荀攸及歆等。歆到，爲尚書郎。［中略］孫策略地江東，歆知策善用兵，乃幅巾奉迎。策以其長者，待以上賓之禮。後策死。太祖在官渡，表天子徵歆。孫權欲不遣，歆謂權曰，將軍奉王命，始交好曹公，分義未固，使僕得爲將軍效心，豈不有益乎。今空留僕，是爲養無用之物，非將軍之良計也。權悅，乃遣歆。賓客舊人送之者千餘人，贈遺數百金。歆皆無所拒，密各題識，至臨去，悉聚諸物，謂諸賓客曰，本無拒諸君之心，而所受遂多。念單車遠行，將以懷璧爲罪，願賓客爲之計。衆乃各留所贈，而服其德。歆至，拜議郎，參司空軍事，入爲尚書，轉侍中，代荀彧爲尚書令。太祖征孫權，表歆爲軍師。魏國既建，爲御史大夫。文帝卽王位，拜相國，封安樂鄉侯。及踐阼，改爲司徒。歆素清貧，祿賜以振施親戚故人，家無擔石之儲。公卿嘗並賜沒入生口。唯歆出而嫁之。［中略］明帝卽位，進封博平侯，增邑五百戶，并前千三百戶，轉拜太尉。［中略］太和五年，歆薨，謚曰敬侯。（晉・陳壽撰『三國志』巻十三，魏書・鍾繇華歆王朗傳第十三）

【作例】

↓「華歆」・「管寧」

かきんかんねい　華歆・管寧

↓「華歆」・「管寧」、「管寧割席」

【作例】

「華歆・管寧」（馬場信意『分類畫本良材』巻三、正徳五年［1715］叙刊本）

かきんごし　華歆忤旨

文帝が禅譲を受けて即位した。朝廷の近臣たちは皆爵位を与えられた。華歆だけは不快感を示して爵位を受けなかった。そのため、帝が長い間不快であった。帝がそのことで尚書令陳群に訊ねた。陳群は「臣下と華歆は漢につとめていた。心には喜んでいるが、顔にはまだ漢に対する義理がある」と答えた。帝が納得した。

【出典】

華嶠譜序曰，文帝受禪，朝臣並受爵位。歆以形色忤旨。徙爲司徒，而不進爵。帝久不懌，以問尚書令陳羣曰，我應天受禪，百辟羣后，莫不悅喜形于聲色。而相國及公獨有不怡者何也。羣曰，臣與相國，

曾臣漢朝。心雖悅喜，義形其色。帝大悅。歆字子魚，平原高唐人。明帝時進拜太尉。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「華歆忤旨」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻二、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かくかいしゃくこう　郭解借交

前漢の郭解は字が伯翁といい、河内の軹（河南省済源東南の軹城鎮）の人である。彼は若い頃任侠で、殺人、盗掘、違法に硬貨を作るなど悪事を遣り放題であった。年を取ってから手を引き、善事をするようになった。しかし、彼の門下生が殺人の罪を犯した。解がその実情を知らないが、やはり罪をかぶり処刑された。

【出典】

前漢郭解字伯翁，河内軹人。靜悍不飲酒。少時陰賊感概，不快意所殺甚衆。以軀借交報仇，臧命作姦，剽攻不休。及鑄錢掘冢，不可勝數。適有天幸，窘急常得脫。長更折節爲儉，以德報怨。厚施而薄望。後坐客殺人。解實不知。御史大夫公孫弘議曰，解布衣爲任俠行權，以睚眥殺人。當大逆無道。遂族解。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「郭解借交」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻九、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かくきょ　郭巨

郭巨は隆慮の人である。一説は河内の温（河南省温）の人である。兄弟三人いるが、父親を早く亡くした。お葬式が終わると、二人の弟が財産を分けるようと要求した。二人の弟がそれぞれ一千万銭をもらい、巨だけはもらわず母親と一緒に住み続けた。夫婦が日雇賃で母親を養う。しばらくすると、妻が男の子を産んだ。巨は考えた。子供を育てることと、母親を養うことと両立するのは極めて困難である。また、老人が食を得て、喜んで孫に分けるので、自分の食を減らしてしまう。この二つの理由で、郭巨は一大決心した。つまり子供を野原に埋めることにする。ところが、土を掘り下げると、石の蓋が現れた。その蓋を開けてみると、一釜の黄金が入っている。中には丹書があり、「孝子郭巨、黄金一釜、これを以て汝に賜る。」と書いていある。これによって、郭巨の名が天下に知られるようになった。

【出典】

郭巨，隆慮人也，一云河内溫人。兄弟三人，早喪父。禮畢，二弟求分。以錢二千萬，二弟各取千萬。巨獨與母居客舍，夫婦傭賃，以給公養。居有頃，妻產男。巨念與兒妨事親，一也。老人得食，喜分兒孫，減饌，二也。乃於野鑿地，欲埋兒。得石蓋，下有黃金一釜，中有丹書曰，孝子郭巨，黃金一釜，以用賜汝。於是名振天下。（晉・干寶撰『搜神記』巻十一）

【作例】

「埋児得金」（『圖像合璧君臣故事句解』巻二、寛文一二年［1672］跋、延寶二年［1674］和刻本）

「爲母埋児」（『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］序、上海點石齋書局石印本）

「爲母埋児」（『新鍥類解官様日記故事大全』巻一、寛文九年［1669］和刻本）

「無題」［郭巨埋児］（中澤道二翁閲『畫本實語教』巻三、享和一年［1801］序三書房梓）

「郭巨」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］吉田新兵衛等刊本）

「郭巨」（南里亭其樂輯、葛飾戴斗畫『二十四孝圖會』、文政五年［1822］河内屋等發兌）

「郭巨」（悟足齋固碩書『二十四孝繪抄』天保一三年［1842］、須原屋等發行）

かくきょうきんけつ　郭況金穴

後漢の郭況は真定の槀（河北省藁）の人である。況は光武帝の郭皇后の弟であるため、光武帝が彼に気を使っている。況のところに賓客が雲集する。しかしそれにしても況は大変謙虚である。帝が何回も況の屋敷に訪れ、諸侯や姻戚と宴会をした。その都度、況に数え切れないほどの金銭やシルクを賜った。故に都に「況の家は金の穴のようだ」という諺が流れていたという。

【出典】

後漢 郭況 眞定 槀人，光武 郭皇后弟。帝善況小心謹愼，年始十六拜黃門侍郎。以后弟貴重，賓客輻湊。況謙恭下士，頗得聲譽。遷大鴻臚。帝數幸其第，會諸侯諸侯親家飲宴。賞賜金錢縑帛，豐盛莫比。京師號況家爲金穴。顯宗卽位，數受賞賜，恩禮俱渥。終特進。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「郭況金穴」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻三、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かきょくめぐりせんり　河曲回千里

唐の玄宗帝の「潼關口号」という五言絶句を図解するものである。

【出典】

河曲回千里，關門限二京。所嗟非恃德，設險到天平。（明皇帝「潼關口號」，清・彭定求等編『全唐詩』巻三）

【作例】

「河曲回千里」［玄宗皇帝］（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］原刻、寛政六年［1794］再刻、有斐堂・玉樹堂刊本）

かくかいじくつ　郭槐自屈

郭槐は晋の重臣である賈充の妻である。賈充の前妻である李氏は大変美貌で才能があるが、父親李豊が処刑されたため、連座で流刑された。晋武帝が即位した後、李氏が赦免され、戻ってきた。武帝が賈充に迎えさせたが、終に槐の猛反対に遭い、辞退した。後に李氏の娘が妃になり、槐が盛装して李氏に挨拶に行った。会った途端、槐が李氏の優雅な態度に圧倒され、思わずに自ら膝を屈して拝礼をしてしまった。（唐・房玄齡等撰『晋書』巻四十、列伝第十）

【出典】

晉書、賈充字公閭，平陽 襄陵人。前妻李豐女。豐誅，李氏坐流徙。後娶郭槐。號廣城君。武帝踐阼，李以赦還。特詔充置左右夫人。郭槐性妒忌，怒攘袂數充曰，刊定律令，爲佐命之功，我有其分。李那得與我並。充乃爲李築室於永平里，而不往來。惠帝爲太子，納槐女爲妃。初槐欲省李氏。充曰，彼有才氣。卿往不如不往。及女爲妃，乃盛威儀而去。既入戶，李氏出迎。槐不覺腳屈，因遂再拜。自是充每出，槐使人尋之，恐其過李氏。李氏淑美有才行。作女訓、行於世。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「郭槐自屈」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻七、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かくがろべん　郭賀露冕

後漢の郭賀は、字が喬卿（きょうけい）といい、洛陽の人である。建武（25～56）年間、賀が荊州（湖北省荊州）刺史を拝命して、大変業績をあげた。地元の人民が歌で彼の徳政を称賛した。顕宗（明帝、57～75在位）

は南陽（河南省南陽）を視察した際、特別に彼に会見し、褒美として三公の黼黻冕旒を賜った。さらに賀が管轄地域を巡視する際、車の前に掛ける帷を開けて、人民に冕旒の姿を見せて、顕彰するよう命じたという。

【出典】

後漢　郭賀字喬卿，雒陽人。建武中爲尚書令。曉習故事，多所匡益。拜荊州刺史。到官有殊政。百姓便之。歌曰，厥德仁明郭喬卿，忠正朝廷上下平。顯宗巡狩到南陽，特見嗟歎，賜以三公之服，黼黻冕旒，敕行部去襜帷，使百姓見其容服，以彰有德。每所經過，吏人指以相示，莫不榮之。拜河南尹，以清淨稱。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「郭賀露冕」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻四、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かくけい　郭瓊

郭瓊は東方郡の人である。顔が醜いが、人のプライバシーをよく知っている。人の家で下宿するとき、いつも薪を照明として読書する。その家の主人の隠している書物を読まなくても内容をよく知っている。

【出典】

郭瓊，東方郡人。形貌醜劣，而意度過人。扶杖遊行，每寄宿人家輒乞薪自照，讀書不眠。主人有笥中秘書纖緯。緘縢甚密，而瓊皆能知之，如悉覽然。莫不服其神異。聞瓊寄宿，則閉戸塞門，蓋恐知其家陰事。瓊每至人家，出袖中一把筭子，散置膝前。則人家隱事皆知。或晝臥，不閉目。行地無蹤。袒裼如狂。漢武帝見而異之。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻二）

【作例】

「郭瓊」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻二、萬暦二八年［1600］刊本）

「郭瓊」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』二、天明四年［1784］、寂照寺蔵板）

かくきょしょうこう　郭巨将坑

→　郭巨

【出典】

舊注引孝子傳云，後漢　郭巨家貧養老母。妻生一子，三歳。母常減食與之。巨謂妻曰，貧乏不能供給。共汝埋子。子可再有，母不可再得。妻不敢違。巨遂掘坑二尺餘，忽見黄金一釜。釜上云，天賜孝子郭巨。官不得奪，人不得取。（唐・李瀚撰『蒙求集注』巻上）

【作例】

「郭巨将坑」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻五、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かくこうしょうせん　隔江招扇

「隔江招扇」は禅宗の公案の一つであり、また「高亭横趨」ともいう。

→　高亭横趨

【出典】

襄州　高亭　簡禪師，參德山，隔江纔見，便云，不審。山乃搖扇招之。師忽開悟，乃横趨而去，更不回顧。（宋・普濟撰『五燈會元』巻七，德山鑒禪師法嗣）

【作例】

→「高亭横趨」

かくこくいき　虢国囲碁

唐の玄宗帝が夏に虢国夫人と囲碁を打つ。楊貴妃が前に立って観戦

する。玄宗帝が負けそうになったところで、楊貴妃が犬を囲碁の盤に上がらせ、囲碁を散らした。すると玄宗帝が大喜びであった。

【出典】

上夏日嘗與親王碁，令賀懐智獨彈琵琶，貴妃立於局前觀之。上數枰子將輸，貴妃放康國猧子於座側。猧子乃上局，局子亂。上大悅。（唐・段成式撰『酉陽雜俎』巻一）

かくこくふじん　虢国夫人

楊貴妃は三人の姉がおり、虢国夫人は楊貴妃の三番目の姉である。他の二人の姉と同日に「夫人」の称号を授かり、韓国夫人、虢国夫人、秦国夫人という。それぞれに毎月十万銭の化粧代をもらうが、虢国夫人だけは自分の顔に自信があるので、いつも化粧せずすっぴんで天子に会うという。

【出典】

七載，［中略］封大姨爲韓國夫人。三姨爲虢國夫人。八姨爲秦國夫人。同日拜命。皆月給錢十萬，爲脂粉之資。然虢國不施粧粉。自衒美艶。常素面朝天。（宋・樂史撰『楊太眞外傳』巻上）

【作例】

「虢國夫人」（清・王翚繪『百美新詠』圖傳八、嘉慶年間［1796～1820］刊本）

「虢國夫人」（『呉友如畫寶』第二集上・古今百美圖、中国古畫譜集成第二十一巻、山東美術出版社、2000年）

かくせんばおうていろく　霍閃波王定六

「霍閃婆王定六」は「活閃婆王定六」の誤りである。

【作例】

「霍閃波王定六」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］序、萬極堂梓）

→「活閃婆王定六」

かくしぎ　郭子儀

郭子儀は華州鄭県（陝西省華県）の人である。子儀は身長六尺余りで、体格ががっちりしている。最初は、武挙（科挙試験の一つである。筆記試験の代わりに弓などの試験をする）を受け、高等補佐官衛長史に任命された。いろいろの軍職を歴任した後、左衛大将軍を拝命した。後に九原太守、朔方節度使、右兵馬使を兼任した。唐の建中二年（781）の夏、郭子儀が重病を患い、徳宗帝が舒王を派遣して見舞いに行った。子儀が起きられなく、寝たまま手をもってお辞儀をした。六月十四日に亡くなった。八十五歳の高齢であった。

伝えることによると、郭子儀が若い頃従軍し、都に派遣され食糧を催促に行った。帰りに銀州まで十数里あるが、日が暮れた。突然風沙が襲いかかってきて、真っ暗になった。仕方なく道端の空き家に入って待機することとなった。夜中に、突然左と右の両側に赤い光が見え、夜空を見上げると、馬車の箱の中に一人の美女が載っている。子儀がお辞儀して言った。「今日は七月七日だ、長壽と富貴をいただきたい。」と。女は笑った。「大富貴だ。それに長壽だ」と言い終わって、再び空に昇った。後に功を立て富貴になった。最後に太尉尚書令尚書となり、八十五歳（一説は九十歳）の高齢で亡くなったという。

【出典】

郭子儀，華州鄭縣人。［中略］子儀長六尺餘，體貌秀傑。始以武舉高等補左衛長史，累歷諸軍使。天寶八載，於木剌山置橫塞軍及安北都護府，命子儀領其使拜左衛大將軍。十三載，移橫塞軍及安北都護府於永清柵北，築城，仍改橫塞爲天德軍，子儀爲之使，兼九原太守、朔方節度右兵馬使。［中略］建中二年夏，子儀病甚，德宗令舒王誼

傳詔省問。及門，郭氏子弟迎拜於外，王不答拜，子儀臥不能興，以手叩頭謝恩而已。六月十四日薨，時年八十五。（後晉・劉昫撰『舊唐書』巻一百二十，列傳第七十）

郭子儀，華州人也。初從軍沙塞間，因入京催軍食。迴至銀州十數里。日暮，忽風砂陡暗，行李不得，遂入道傍空屋中。藉地將宿。既夜，忽見左右皆有赤光。仰視空中，見輧軸車繡屋中，有一美女，坐牀垂足，自天而下俯視。子儀拜祝云，今七月七日，必是織女降臨，願賜長壽富貴。女笑曰，大富貴，亦壽考。言訖，冉冉昇天，猶正視子儀，良久而隱。子儀後立功貴盛，威望烜赫。大曆初，鎮河中，疾甚，三軍憂懼。子儀請御醫及幕賓王延昌、孫宿、趙惠伯、嚴郢等曰，吾此疾，自知未到衰殞。因話所遇之事，衆稱賀忻悅。其後拜太尉尚書令尚父。年九十而薨。出神仙感遇傳［注：『神仙感遇傳』には見られない］（宋・李昉等撰『太平廣記』巻十九）

【作例】

「郭子儀」（明・天然撰『歴代古人像讃』、弘治一一年［1498］刊本）

「郭子儀像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物六巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「郭忠武」（清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年［1743］刊本）

「中書考」［尚父郭汾陽王］（清・金古良編・繪『無雙譜』、康熙二九～三八年［1690-1699］刊本）

「郭子儀」（葛飾北斎作、『北斎美術館』5、葛飾北斎美術館所蔵）

「郭子儀」（『畫圖百珍』下、明治一七年［1884］刊本）

がくしょうこうしゅ　楽昌公主

樂昌公主は徐德言に嫁いだ。陳が滅亡の直前、樂昌公主と徐德言は鏡を二つに割り、それぞれに半分を持ち、離散される前に、上元の日に都の市で売ると約束した。後に公主が楊素の妾となった。德言が上元の日に約束通り都の市にやってきた。やっぱり半分の鏡が売られていた。德言は持っている半分を出して照合してみると、ぴったりであった。悲しくて半分の鏡に詩を題した。「鏡は人と共に行ってしまった。鏡は戻ってきたが、人は戻ってこない。」と。樂昌公主が詩を得て、泣き止まなかった。楊素がそのわけを聞くと、公主が事実を教えた。翌日、素は德言を招き、公主を彼に帰した。これはすなわち有名な「破鏡重圓」のストーリーである。

【出典】

陳太子舍人徐德言之妻叔寶之妹封樂昌公主，才色冠絕。時陳政方亂，德言知不相保，謂其妻曰，以君之容，國亡必入權豪之家。儻情緣未斷，猶與相見。宜有以信之。乃破一鏡，人執其半。約曰，他日必以正月望日賣於都市。我當在卽。以是日訪之。及陳亡，其妻果入楊素之家。德言遂以正月望日訪於都市。有蒼頭賣半鏡者，大高其價，人皆笑之。德言直引至其居，出半鏡以合之，仍題詩曰，鏡與人俱去，鏡歸人不歸。無復姮娥影，空餘明月輝。陳氏得詩，涕泣不食。素知之，還其妻，仍厚遺之。與德言歸江南，竟以終老。（宋・李昉等撰『太平御覽』巻三十）

【作例】

「楽昌公主」（清・顔鑑塘撰、王翹繪『百美新詠』圖傳三十、嘉慶年間［1706～1820］刊本）

かくだいつう　郝大通

郝大通、字は太古、号は恬括子といい、寧海の人である。幼い頃父親を亡くし、母親に大変孝行した。かつて郝大通が神人の夢を見て易を教わったので、陰陽、律暦、占いなどに詳しい。呂洞賓が寧海に行った際、郝大通を弟子にした。後に郝大通が岐山に行き、神人に易を教わった。予言したことはよく当たる。かつて郝大通が趙州橋の下に座

り、子供たちが悪戯で煉瓦や石で彼の頭に積み重ねて、塔の形にした。それに「壊さないように。」と言い付け加えた。郝大通が子供たちの言われる通りに六年間動かなかった。寶慶元年に郝大通が寧海の先天観という寺院で亡くなった。年は七十三歳であった。彼は三年前に自分の死を予知できて、葬儀の準備をしていたという。

【出典】

郝大通，字太古，號恬然子。寧海人。少孤。事母甚孝。嘗夢神人示以周易秘義，由是洞曉陰陽律曆卜筮之術。重陽至寧海，因點化入道。後至岐山。復遇神人授以易義。凡言休咎，無有不驗。嘗坐趙州橋下而不語。時爲小兒輩戲累磚石爲塔於頂，囑以勿壞。頭竟不側。河水泛濫，略不爲動，而亦不傷。如是者六年。寶慶元年，仙蛻於寧海先天觀。七十有三。前此三年，以預修葬事。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻八）

【作例】

「郝大通」（明・王世貞『有象列仙全傳』巻八、萬暦二八年［1600］刊本）

「郝大通」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］保壽堂・養心堂刻本）

「郝大通」（馬場信意『分類畫本良材』巻五、正徳五年［1715］刊本）

がくたんれんへき　岳湛連璧

潘岳（247～300）は、字は安仁といい、滎陽中牟（河南省中牟）の人である。幼い頃から才能があり、郷里では「奇童」と呼ばれていた。岳は美貌で有名で少年の頃、よく洛陽の郊外に出かける。途中婦女たちが皆彼の車に果物を投げ込む。岳は『西征賦』などで文名を馳せていた。夏侯湛（243～291）は、字は孝若といい、譙国の譙（安徽省合肥）の人である。彼も美貌で才能があり、潘岳と親交がある。二人は世に「双璧」と称賛された。（唐・房玄齢等撰『晋書』巻五十五、中華書局）

【出典】

晉潘岳字安仁，滎陽中牟人。少以才穎見稱，鄉邑爲奇童。謂終賈之儔也。夏侯湛字孝若，譙國譙人。幼有盛才，文章宏富，善構新詞。美容觀。與潘岳友善，每行止同輿接茵，京都謂之連璧。（唐・李瀚撰『蒙求集注』巻上）

【作例】

「岳湛連璧」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻三、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

がくひ　岳飛

岳飛（1103～1141）、字は鵬挙といい、相州湯陰（河南省湯陰）の人である。代々農業を営んでいた。父親の名前は和という。和は自分の食事を節約して飢饉にあったものを助ける。ある人は和の耕地を食い込んだが、和は耕地を割ってあげた。また、和は借金のある人に返済を催促しない。岳飛が生まれた時に、鵠のような大鳥が家の上で鳴きながら飛びまわった。そのため「飛」と名付けた。生まれて一ケ月経っていないのに、黄河の堤防が決壊し、母親姚氏は飛を抱きしめて甕に乗り、波で川辺に打ち上げられ、救助された。皆は奇跡と思われた。岳飛は少年の頃から気骨があり、口数が少なかった。家は貧しいが、一所懸命に勉強した。中には左伝や孫子兵法が好きであった。生まれつきの力持ちで、弱冠にして三百斤の弓をや八石の弩を引ける。周同に射りを習い、その技術をすべてマスターした。背中に「盡忠報国」（忠を尽くし、国に報いる）との刺青の四文字がある。岳飛は金の侵略に抵抗するよう主張したため、時の宰相秦檜の恨みを買った。ついに秦檜に投獄され、処刑された。

【出典】

岳飛，字鵬舉，相州 湯陰人。世力農。父和，能節食以濟饑者。有耕侵其地，割而與之。貰其財者不責償，飛生時，有大禽若鵠飛鳴室上，因以爲名。未彌月，河決內，黃水暴至，母姚抱飛坐甕中。衝濤及岸，得免。人異之。少負氣節，沈厚寡言，家貧力學，尤好左氏春秋、孫吳兵法。生有神力，未冠挽弓三百斤，弩八石，學射於周同，盡其術，能左右射，同死。朔望設祭於其冢，父義之，曰，汝爲時用其徇國死義乎。［中略］使者至，飛笑曰，皇天后土可表此心。初命何鑄鞠之，飛裂裳以背示鑄，有盡忠報國四大字，深入膚理，既而閱實無左驗，鑄明其無辜，改命万俟卨，卨誣飛，與憲書令虛申探報以動朝廷，雲與憲書令措置使飛還軍，言其書已焚，飛坐繫兩月無可證者，或教卨以臺章所指淮西事爲言，卨喜白檜，簿錄飛家取當時御札，藏之以滅跡。又逼孫革等證飛受詔逗留，命評事元龜年取行軍時日雜，定之傅會其獄，歲暮獄不成，檜手書小紙付獄，即報飛死，時年三十九。（元・脫脫等撰『宋史』巻三六五，列傳第一百二十四）

【作例】

「岳飛登金山寺」（明・熊大木編『新刊大宋演義中興英烈傳』、嘉靖三一年［1552］刊本）

「岳飛番兵相交戰」（『新刻出像音注岳飛破虜東窓記』、萬曆年間［1573～1620］刊本）

「岳忠武王」（清・上官周『晚笑堂畫傳』、乾隆八年［1743］刊本）

「三字獄」「岳鄂王」（清・金古良編繪『無雙譜』、康熙二九～三八年［1690～1699］刊本）

「岳飛」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻四、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1753］刊本）

かくぶんゆうざん　郭文遊山

郭文（生卒不詳）は、字は文挙といい、河内の軹（河南省済源東南の軹城鎮）の人である。子供の頃、郭文が山水を愛していた。十三歳に山林に入る度に大自然に魅了され家に戻りたがらない。両親が亡くなった後、文が結婚せず、名山を歴遊し、後に王導に招かれ、西園にいさせた。園の中の林に多くの果実が実り、また多くの動物が生息している。文がその中で七年いた。後に逃げ出して、臨安で住むことにした。臨安令（行政長官）万寵が彼を迎えた。文が病気で亡くなる前に、寵が彼に「後何日持つか」と尋ねた。彼が片手を三回挙げた。

果たして十五日後、文が亡くなったという。すなわち、指五本で三回挙げると十五という数字となる。（唐・房玄齢等撰『晋書』巻九十四）

【出典】

晉書，郭文字文舉，河內 軹人。少愛山水，尚嘉遯。每遊山林，彌旬忘反。父母終。不娶。辭家遊名山。洛陽陷，乃步擔入吳興 餘杭大辟山中，窮谷無人之地，倚木於樹，苦覆其上而居焉。亦無壁障。時猛獸爲暴，而文獨宿十餘年，卒無患。常著鹿裘葛巾，不飲酒食肉。王導召置園中。七年未嘗出入。後逃歸臨安，結廬山中。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「郭文遊山」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かくぼく　郭璞

郭璞（276～324）、字は景純といい、河東聞喜（湖北省松滋）の人である。博学で才能がある。詩賦が得意で、卜術の造詣が深い。蕙帝、懐帝の頃、郭璞は占いをし、天下が戦火に騒がれることを知り、東南に避難した。後に王敦に殺された。王敦の亂の後、郭朴が弘農太守という官職を追贈された。後に仙人「水府仙伯」になったという。著書

には『爾雅』注釈、『穆天子伝』、『山海経』などがある。

【出典】

郭璞，字景純，河東 聞喜人也。父瑗，尚書都史令。時尚書杜預有所増損，瑗多駁正之，以公方著稱。終於建平太守。璞好經術，博學有高才，而訥於言論，詞賦爲中興之冠。好古文奇字，妙於陰陽筭曆。有郭公者，客居河東，精於卜筮。璞從之受業。公以青囊中書九卷與之，由是遂洞五行、天文、卜筮之術。攘災轉禍，通致無方，雖京房、管輅不能過也。璞門人趙載嘗竊青囊書，未及讀，而爲火所焚。蕙懐之際，河東先擾。璞筮之，投策而歎曰，嗟乎，黔黎將湮於異類，桑梓其翦爲龍荒乎。於是潛結姻昵及交遊數十家，欲避地東南。抵將軍趙固，會固所乗良馬死，固惜之，不接賓客。璞至，門吏不爲通。璞曰，吾能活馬。吏驚入白固。固趨出，曰，君能活吾馬乎。璞曰，得健夫二三十人，皆持長竿，東行三十里，有丘林社廟者，便以竿打拍，當得一物，宜急持歸。得此，馬活矣。固如其言，果得一物似猴，持歸。此物見死馬，便嘘吸其鼻。頃之馬起，奮迅嘶鳴，食如常，不復見向物。固竒之，厚加資給。行至廬江，太守胡孟康被丞相召爲軍諮祭酒。時江淮清宴，孟康安之，無心南渡。璞爲占曰敗，康不之信。璞將促裝去之，愛主人婢，無由而得，乃取小豆三斗，繞主人宅散之。主人晨見赤衣人數千圍其家，就視則滅，甚惡之。請璞爲卦，璞曰，君家不宜畜此婢，可於東南二十里賣之，慎勿爭價，則此妖可除也。主人從之。璞陰令人賤買此婢。復爲符投於井中，數千赤衣人皆反縛，一一自投於井。主人大悅。璞攜婢去。後數旬而廬江陷。［中略］王導深重之，引參己軍事。嘗令作卦，璞言，公有震厄，可命駕西出數十里，得一柏樹，截斷如身長，置常寢處，災當可消矣。導從其言，數日果震，柏樹粉碎。［中略］璞撰前後筮驗六十餘事，名爲洞林。又抄京、費諸家要最，更撰新林十篇，卜韵一篇。注釋爾雅，別爲音義、圖譜。又注三蒼、方言、穆天子傳、山海經及楚辭、子虚、上林賦數十萬言，皆傳於世。（唐・房玄齢等撰『晉書』巻七十二，列傳第四十二）

郭璞，字景純，河東 聞喜人。性好經術，博學有高才。而訥於言論，詞賦爲中興之冠。好古文奇字，妙於陰陽筭曆。有郭公者，客河東，精卜筮。璞從之受業。公以青囊書九巻與之。由是遂洞五行天文卜筮之術。禳災轉禍，通致無方，雖京房 管輅不能過也。璞門人趙載竊其青囊書，未及讀，爲火所焚。蕙 懐之際，河東騒擾。璞知其將亂，乃潛結姻昵及交遊數十家，避地東南，投將軍趙固。會固所乗良馬死，固惜之不接賓客。璞至，門吏不爲通。璞曰，吾能活馬。吏驚入白。固輒出曰，君能活吾馬乎。璞曰，得健夫二、三十人，皆持長竿，東行三十里，有丘林廟社者，便以竿打拍，當得一物，急持歸，馬活矣。固如其言，果得一物似猴，持歸。此物見馬死，便嘘吸其鼻。頃之，馬起，奮迅嘶鳴如常，不復見向物。固大稱賞，厚加資給。後至廬江，勸太守胡孟康急南渡，康不從。璞愛其婢，乃取赤豆繞主人宅散之。主人毎見赤衣人數千圍其家，就視則滅，甚惡之。請璞爲卦，璞曰，君家不宜畜此婢，可於東南二十里賣之，慎勿爭價，則此妖可除也。主人即從之。璞因令人賤買此婢。復投符於井中，數千赤衣人皆反縛，一一自投於井。主人大悅。璞攜婢去。後數旬而廬江陷。既渡江，王導深重之，引參己軍事。嘗令作卦，璞言公有震厄，當命駕西出數十里，得一栢樹，截斷如身長，置常寢處，災可消。導從其言，數日果雷震栢樹粉碎。母喪，卜葬地於暨陽，墓去水不盈百歩。時人以爲近水，璞曰，將當爲陸。其後沙漲，去墓數十里，皆爲桑田。［中略］璞以才學見重一時，然性輕易。不修威儀，嗜酒好色，時或過度。著作郎干寶常誡之曰，此非適性之道也。璞曰，吾所受有限，用之常恐不得盡。卿乃憂酒色爲患乎。璞素與桓彝友善，彝毎造之，或値璞在婦所，便入。璞曰，卿來，他處自可徑前，但不可廁上相尋耳。必客主有殃。彝後因醉詣璞，正逢在廁，掩而觀之，見璞裸身披髪，銜刀

設醊。璞見彝，撫心太息曰，吾每囑卿，復更如是。非但禍吾，卿亦不免矣。天實爲之。將以誰咎。璞終嬰王敦之禍。彝死蘇峻之難。［中略］王敦平，追贈弘農太守。璞未遇害之先，已預令家人，備送終之具於行刑之所。命卽窆於江側兩松之間，斬後三日，南州市人復見璞。著其平日服飾，與人共話。敦聞之，開棺無尸。謂兵解也。後爲水府仙伯。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻四）

【作例】

「郭璞」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻四、萬暦二八年［1600］刊本）

「郭璞」（葛飾爲斎繪『萬物圖解爲斎畫式』二帙、元治一年［1864］序、河内屋茂兵衛刊本）

「郭璞」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］序、吉田新兵衛等刊本）

がくようろう　岳陽楼

岳陽楼は岳州府（湖南省岳陽）にある。洞庭湖に面しているので、古来文人たちがよく遊覧したり、詩文を作ったりするところである。中でも有名なのは北宋の范仲淹が書いた『岳陽楼記』である。

【出典】

岳陽樓，城西門樓也。下瞰洞庭景物寬闊。唐開元四年中書令張說除守此州，每與才士登樓賦詩。自爾名著。（宋・范致明撰『岳陽風土記』不分巻）

慶歷四年春，滕子京謫守巴陵郡。越明年，政通人和，百廢俱興，乃重修岳陽樓。增其舊制，刻唐賢今人詩賦於其上。屬予作文以記之。予觀夫巴陵勝狀，在洞庭一湖。銜遠山，呑長江。浩浩蕩蕩，横無際涯。朝暉夕陰，氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。前人之述備矣。然則北通巫峽，南及瀟湘。遷客騷人，多會於此。覽物之情，得無異乎。若夫霪雨霏霏，連日不開。陰風怒號，濁浪排空。日星隱耀，山岳潛形。商旅不行，檣傾楫摧。暮冥冥，虎嘯猿啼。登斯樓也，則有去國懷鄉，憂讒畏譏。滿目蕭然，感及而悲者矣。至若春和景明，波瀾不驚。上下天光，一碧萬頃。沙鷗翔集，錦鱗游泳。岸芷汀蘭，郁郁青青。而或長煙一空，皓月千里。浮光曜金。靜影沉璧，漁歌互答。此樂何極。登斯樓也，則有心曠神怡，寵辱皆忘。把酒臨風，其喜洋洋者矣。嗟夫，予嘗求古仁人之心，或異二者之爲，何哉。不以物喜，不以己悲。居廟堂之高，則憂其民。處江湖之遠，則憂其君。是進亦憂退亦憂。然則何時而樂耶。其必曰，先天下之憂而憂。後天下之樂而樂乎。噫，微斯人吾誰與歸。（宋・范仲淹「岳陽樓記」，宋・呂祖謙撰『宋文鑑』巻七十七）

【作例】

「岳陽楼圖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理十巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「岳陽」（明・墨繪斎『名山圖』、崇禎年六［1633］刊本）

「岳陽城楼」（渡邉英編『邉英畫譜』巻三、文化三年［1806］序刊本）

「岳陽城楼」（渡邉英編『玄對畫譜』巻三、文化三年［1806］序・題、大清蔵板）

「岳陽楼」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻二、享保二年［1719］寶文堂壽梓）

「岳陽晩景」（普斎岡子雉著述［大岡普斎］、橘辨次守国［橘辨次］圖畫『畫典通考』巻四、享保一二年［1727］寶文堂刊本）

かくりせんせい　角里先生

角里先生は四皓の一人である。

【作例】

「角里先生」（滝澤清畫『潛龍堂畫譜』人物之部、明治一五年［1882］

松嵜半蔵刊本）

三一